

# 未曉庵富英編『俳時津風』

— 手錢記念館所蔵俳諧資料（二五） —

伊藤善隆

## はじめに

本稿は、鳥根県出雲市大社町の手錢てげん記念館に所蔵される俳諧資料の中から、未曉庵富英編『俳時津風』（寛政四年刊、半紙本一冊）を翻刻紹介するものである。

本書は、内題に「奉納雲陽三穂神社誹諧之発句」とあるとおり、三保神社に奉納された句合の入選句を集めた句集である。凡例によれば、一万五千余句の応募があった中から、二百句が選ばれて額面に仕立てられて美保神社に奉納された、本書には、その二百句と追加百七十句が収録されている。

序文を記したのは、伽羅庵二世を継いだ兀庵旨原（二世旨原、？～寛政六年）である。雲州松平家は、雪淀（第六代藩主松平宗衍）以来、江戸座の伽羅庵を最原にしていたことは、拙稿「出雲俳諧史と大社俳壇」（『いずも財団叢書5 出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』今井出版、平成30年11月）他で指摘した通り。寛政四年三月の年記がある本書序文の最後に、「松府御後園の青紅堂におひて書之」とあるから、当時、兀庵旨原は松江に滞在していたことが判る。

なお、選者の富英については未詳。『松江市史 通史編4』（松江市、令和2年3月）の第九章第四節の「三 俳諧の世界」（小林准士氏執筆）は、本書に言及、入集する雲州俳人の一覽も作成されており、「富英については詳らかでないが、（中略）点取俳諧の宗匠であったと考えられる」と指摘されている。

なお、原本の画像は、Web上に公開されており、「山陰地域史資料アーカイブ」(<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/3290515100>)から、「手銭家文書」↓「詩歌」↓「時津風」で確認することができる(令和2年11月26日確認)。なお、手銭記念館には、二本の『時津風』が所蔵されているが、その内の一本(題簽が表紙中央に貼付されている一本)は第九丁を欠いている。

#### 〈付記〉

本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九～二〇二二年度、代表・田中則雄)、科学研究費補助金(18K00296)の研究成果の一部である。

#### 〈書誌〉

書型……刊本。半紙本一冊。楮紙、袋綴じ。

表紙……香色原表紙。縦二二、八cm×横一五、五cm。

題簽……原題簽、左肩単辺。「時津風」。

内題……「奉納雲陽三種神社誹諧之発句」。

版式……序文は無辺無界每半葉七行一四字内外。

本文は無辺無界每半葉一行。

字高……一五、五cm(序文初行「治まれ〱関の戸も」を計測)。

刊記……「維時寛政四壬子彌生吉辰〱心齋橋筋北久太郎町北<sub>社</sub>

入〱浪華書林 丹波屋伝兵衛」。

丁数……全一九丁。

その他……表紙見返しに「五葉館藏書」と墨書。

#### 〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。

異体字等は、つぎに示すとおり、概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「を〱つけ、(〱内)にその丁数、および表・裏(オ・ウ)を示した。

難読の箇所は□で示した。

参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

〔翻刻〕

俳時津風

〔白紙〕

〔風声水音〕〔刻陽〕

治まれる時につれ、数の関の戸も名のみなる中に、当国三保の関は、往昔海路にかよふ千船百ふねのかずく、あらためたゞせし関なりとかや。かならずしも、かたへに霊神鎮座します。されば、関路の神に」(序二) 幣奉るなど、よみたる歌も見へたり。此御やしるも、ふるくよりしらしめす御神なれば、汐風浦風にみあらか荒て、いとゞ神寂わたらせ給ふ。中頃、遠津島根へ遷幸有りし帝も、こゝに御船懸して、一夜帰洛の御祈誓ありて、」(序二) ふたゞび帝位につかせ給ふなど、世にいちぢるき神徳なるべし。爰に、富英、此道にこゝろざし深く、老のすこやかなるまごゝろを尽して、此国の好士をすゝめ、法楽の吟を備ふ。此時、三保の関路の浪おさまり、家くゝに俳諧をうたふも、戸ざゝぬ」(序三) 御代のしるしと知るべし。

武蔵国隠士

兀庵旨原識

維昔寛政壬子

やよひ日

〔兀庵〕〔方印刻〕

松府御後園の青紅堂におひて書之

奉納雲陽三穂神社俳諧之発句

雲陽松江未暁庵富英選

凡例

一、集る処の発句一万五千余内拔萃の句、三百七拾章。此内にて高判の吟二百章を挙て額面となす。

点数

- 一、壓巻 百五十点 巻頭 ヨリ十 マデ
- 一、粉叟 百三十点 十一 ヨリ三十五 マデ 并二巻軸
- 一、玉祐軍 一百点 三十六 ヨリ六十五 マデ
- 一、泰龍 八十五点 六十六 ヨリ百十 マデ
- 一、月調 六十点 百十一 ヨリ百七十 マデ
- 一、丸鵬菊 五十三点 百七十一 ヨリ百九十九 マデ

余興点数

- 一、鵬菊 五十点 一番 ヨリ八 マデ
- 一、聞鵬 四十点 九 ヨリ廿八 マデ 并終
- 一、梅菊 三十五点 廿九 ヨリ五十八 マデ
- 一、梅牛 三十二点 五十九 ヨリ八十八 マデ
- 一、丸梅 廿八点 八十九 ヨリ百二十 マデ
- 一、神梅 廿五点 百廿一 ヨリ百六十九 マデ

卷中○此印を以点数の節々と知らしむるものなり。〔凡例〕

巻頭 長閑さや帆に折々の富士嵐

濁り明く艸の折戸や萩の声

散跡は一筋づゝの柳かな

御手洗の手拭白し梅の花

蚊遣火や番匠留めて松の月

玉川に梅の有あり河豚汁

雪の夜や静に消る石燈籠

口あひて鳥物すわぬ暑かな

盗人は女也けり桃の花

物書た材木町の柳かな

○沓片足御幸の跡や瓜畠

帷子や行儀にねまる朝の内

竹の子や藪の主の親ごゝろ

露ほども雫は見せぬ松露哉

芭蕉葉の無底に残る暑かな

巫も俱に留主也神無月

鎌倉に何の五輪歎苔の花

百貫の芋喰ふ寺や今日の月

辻君と出女咄す霜夜かな

初夢や今朝見れば此扇の絵

稲妻やそこが切戸の文珠堂

琴める女ぢからや糸柳

若州小浜

雲州杵築

同 宍道

伯州米子

雲州松江

作州勝山

伯州米子

雲州松江

同

摂州大坂

雲州松江

但州浜坂

作州勝山

雲州松江

石州大国

雲州杵築

伯州米子

雲州松江

雲州松江

伯州米子

巨川

冠李

芦笛

貞下

富水

里翠

富石

富寛

其積

駝岳

度翠〔ウシ〕

如水

稲友

知友

積水

喬山

時石

倭川

度翠

冠李

可積

一柱〔ウシ〕

明なばと夜さへ夜にせぬ花見かな

虫聞くや罪も報も無住寺

白露や田守が曙の藁庇

本尊は生るが如しかんこ鳥

虫啼や塚の後□の捨灯籠

鹿啼や油次足す御灯守

七艸に見付られたり露の臺

梅咲や解忘れたる白の注連

見届る美女いつ失つ山桜

古池や落葉の上に水五寸

朝船や日もこもり江の薄霞

独寝のまくら二つや鹿の声

喰つみやきのふの昔物語

○入院して寝ぬ夜がち也鹿の声

涼しさにすがつて見たる柳哉

気違の笑ひも止△歎秋の雨

湯豆腐の味覚へたり初時雨

野鼠の牙の跡あり唐がらし

鐘はいづこ若葉に包む東山

松植て昼寝がち也蟬の声

眠る子に廻して見せる日傘哉

燈の見ゆる峯は横川歎夕時雨

雲州三保関

同 松江

同 松江

同 新庄

同 松江

同 杵築

同 松江

同

同

同

作州弓削

雲州松江

同

同

同

同

同

同

同

雲州松江

伯州米子

可積

万路

清仙

黎慶

臥雲

竜志

鶴子

免僕

万水

臥雲

竜志〔ウシ〕

白旗

寿風

指秋

富川

遊糸

里橋

湖竜

巨川

富水

蘭水

芦丈〔ウシ〕

煤掃や寄て銘読む枕鎗	雲州松江	富滝	朝ぎりや船岡山も嶋がくれ	同	大垣	烏洲
顔見世に顔見せ始る娘かな	同 杵築	巨川	坂口に日の喰こぼす椿かな	雲州松江		鶴江
暖な露置替つ蓮の飯	伯州米子	籟之	秋風やまだ肌薄き鳥の子	同		有積
秋風や心なく立つ馬の耳	雲州松江	富守	梅咲や庭に広げる絵双六	同		其友
卯の花や鞍馬戻りの薄月夜	但州浜坂	縞水	薺の花見はずすな親二人	石州		山洞
鹿啼や昔語りの老女夫	作州勝山	鷹平	鹿啼や昔男の通ひ道	雲州松江		賜錦
朝寝する片側町や春の雨		蘭水	空言は絵斗でなし村しぐれ	同 宍道		奇盛
雨晴て井に降る音や椎が元		倭川	喰残す牧の野末や花董	同 松江		富覧
蕎麦咲や一畝に足らぬ山かづら		一桂	葉牡丹に殊足る人の朝寐哉	同 今津		如舟
竹の子や一夜違の兄弟	雲州母里	指鳳	昼貞や其外艸は草枕	同 松江		龜齡
三日月の弦音もなき照射哉		度翠 <small>(一三)</small>	尼寺の庭にも一穂麦の秋	伯州日野		蘭香 <small>(一四)</small>
蟬啼や天津空なる摩耶の鐘	伯州米子	理々	初雪やねまり直して峯一ッ	雲州松江		和風
能因は逢はぬ分也夏の月		富水	長者富に飽ぬ詠や冬牡丹	石州大國		楚江
世ごと俣に暮す姿や蝸牛		里橋	鶯やまだ朝々の薄水			富石
乞食も家内連也初ざくら		富滝	辻堂の仏あなどる燕かな	伯州米子		魚淵
月のなき夜も捨られぬ火花哉	雲州杵築	寿山	白魚や一かたまりに淡路島			駝岳
苦焼の売も身軽し初裕	同 松江	富梁	夜桜や浮世をいとふ人も出	雲州井尻		井扇
藁簀の千筋に重き垂水哉	同	亀青	取取ぬ背戸のメリや鹿の声			可積
順札の流し札あり磯千鳥	同	都扇	夕ぐれや門田に余る植乙女	同 松江		知来
陽炎や野飼の駒の鼻の先	伯州米子	臥更	鶯や子を捨かねる數の内	同		枝一
白き手の簾より洩る雪見哉	若狭小浜	士峯	花園の後 <sup>口</sup> 住居や種瓢			一臥
引惑ふ勅定もなし杜若	雲州宍道	一臥 <small>(一三)</small>	白菊や十日の庵に客独り	同 母里		樵山 <small>(一四)</small>

娘まつ餅 <small>ほく</small> くさし春の雨	冠李	○更るほど風腥き鶺鴒かな	同	知風
馬で見に行古郷や梅の花	芦丈	鯛や干瓢削る峯の寺	同	富滝
小座頭を先に達たる花見哉	竹斐	衛士が火もやせる頃也遠砧	同	富由
歌よみて廓に残す扇かな	淇洲	覚て聞けば八幡山崎遠砧	同	度翠
闇にさへ世は用のある花火かな	積水	児の手のけふは届かぬ葵かな	同	吟峯
名斗の寺物凄し饅珠沙花	如舟	昼白や底のぬけたる縄釣瓶	同	紅羅
曾以詔らはぬ世や露の臺	芦丈	初雁や少し盈るゝ冠き水	同	鶴江
風に散る物ともみへぬ椿かな	寿山	松杉を抱すくめたり蝉の声		富梁
鶯や釣竿 <small>えら</small> む竹の奥	柳下	夕良や厩の窓の下り蜘蛛		如舟
雪の中隣へ戻す旭かな	蘭水	天蓼も同じ径や梅の花	摂州大坂	東門
雨乞の幣もうごかぬ暑かな	万水 <small>(ウ)</small>	祝子が燈にかざす手や時鳥		理々 <small>(ウ)</small>
東雲や露ゆづり合ふ蓮の音	伯州米子	高取の城はいづこぞ霧の朝	雲州松江	紙定
節季候や皆うら白の額髪	駝岳	河骨や紙帆も走る川嵐		富水
春雨や和尚の膝に鼠の子	白扇	思ひくらぶ班女が闇の夜寒哉		和風
すゝしさや腹ふくらして淡路の帆	同 久白	武庫山はまだ寐ぶ気也朝霞	同 杵築	五鈴
禿まで返事短き師走かな	同 安来	山吹や所せきまで馬の糞	同 井尻	的羊
朝東風や掬する水の幾半	同 松江	東雲や露だけ重き冠き柴		筍柳
野嵐の諂ひ兼つ古柳	同 馬潟	葉柳や藤沢寺の施行札	同 松江	所勇
鶺鴒の尾に砕けけり初氷	若州小浜	落栗や女切なき奥の院		都扇
睦言に魂なき夜半や竹婦人	雲州松江	樽提る人柄でなし水仙花	同 新庄	不老
高安の留主の友也きりくす	伯州米子	蛙なく樋守が軒の雨夜哉		倭川
初雁や宿屋へ配る貸蒲団	雲州松江	初雁やしかも絵鳥の見へがくれ		可積 <small>(ウ)</small>

着て見れば是さへ重し夏羽織	唐僧の杳も鳴る也びわの花	永き日や花あればこそけふも暮	着れば憂し田簀の嶋の春の雨	明寺や此頃けふるはつ桜	人住まぬ化生屋敷や花茨	どれ見ても狭き蒲団や角力取	山守の名も書留し桜かな	高砂の夫婦も若し謡始	寒垢離や檐荷に凍付く朝の月	鹿鳴や山の額に神宮寺	凧や軒からつく釣瓢	茸狩や谷の烟りは京の人	乗せた子の月を教る鵜舟哉	束の間に明暮しげき時雨哉	なやめるは花の重み歎糸さくら	吹ば降る雪の癖あり山桜	流れ行月を礎や涼舟	蛤の寐姿もあり磯の月	熊野路を出て見上るや雲の峰	水もなき寺井のもとや墓の声	月涼し神馬連行く下河原	
	伯州倉吉	雲州松江	若州	雲州安来	同 松江	同 六道	若州小浜	雲州松江								雲州井尻	同 本庄					
五鈴	春亀	巴竜	巨川	其垣	有蘭	清仙	万水	蓬山	八風	都扇 <small>(一七)</small>	吟峯	富石	指秋	奇盛	全	龜玉	野牛	竜志	時石	富守	湖竜 <small>(一七)</small>	
万歳の戻る河原や隴月	東に星只一ツ梨子の花	鹿啼や尾崎を急ぐ小焼灯	引舟の綱の重さよ夜の霜	時雨るや横に簀着る涉し守	常に見ぬ鳥の糞あり桐の花	茸狩や残らず見ゆる京の町	芹摘むや鶴脛ぬれて向ひ河岸	放したる馬は只行く枯野哉	どんぐりや押やられたる柴車	草取の笠だけ分かる青田哉	朝霧や印も見えぬ三輪の山	二代目の長者も見たり冬牡丹	松明の行衛乏しき枯野哉	化粧せぬ顔は癖なし山桜	子にも貸す其衣くや竹婦人	子を呵る井筒にもろき一葉哉	行春や松の梢に几巾の骨	三日月の入江に淋し崩れ籜	隣しもとなり知らずや冬籠	魚遊ぶ潦あり汐干渴	いまわしや鰯釣夜より時鳥	
雲州松江	伯州米子				雲州九重	伯州米子	伯州米子			雲州松江	雲州杵築	同 松江	同	石州波積	雲州松江	因州鳥取	雲州松江					雲州松江
稲蝸	東湧	臥雲	知来	魚淵	起石	敬之	可積	晴光	富守	呂船 <small>(一八)</small>	仙菊	歌集	似教	藤人	金枝	呉牛	橘秀	和風	蘭水	倭川	椿子 <small>(一八)</small>	

嘶れて物知り顔や室の梅

同 杵築女 ちか

五月雨や暮の這出る鞠懸り

籟之

卷軸

結ぶにも足らぬ清水や苔の花

富由

稲妻や鸚鵡返しに壱岐対馬

全

○鈴虫や幣取あへぬ夕端山

備前岡山

浅竹

嵐山あらしぞ見へね雲の峯

野牛

右額面

寒念仏渠も人にて衾也

雲州松江 女 花夕

【桃華細】(刻臨) 追加

相嫁の模様くらべや土用干

同 何用

すゝしめや、神ごゝろ。恐ありや、さがなき老の

狭菴に重なる夜半の干菜哉

指秋

気力うすく、数千の句章を撰行し侍ること、豫め

朝ぎりや籠人下る寺の坂

紅羅

成るといへども、いさゝか【(ウ十一)】広前に備へて

欄干に人肌たへ<sup>(薄ッ)</sup>夕涼

雲州松江 普唱

遥拝し奉りぬ

稲妻のちらと見せたる娘かな

蘭水

見そなわし

夕月や霞の中の鏡山

東湧【(ウ九)】

実ならば鳴らん

按摩来て勧てうたすしころかな

時石

桃の花

海賊の月に盗むや山ざくら

富水

鞍艸や舍人の眠る加茂塘

免僕

古稀叟

夕只や雫たり止む洗ひ鉢

和風

鶉富英

音のせぬ滝も有けり森の藤

稲蝸

【未堯庵】(刻臨) 【富英之印】(刻臨)【(ウ十一)】

舟屋形傾くかたや夏の月

雲州松江

露蛩

埋井を適に見る日や冬椿

雲州松江

一桂

余興

順礼に宿かす森や蟬の声

雲州松江

花積

朝霧や日にぬれて行馬の尻

度翠

古くさき火鉢取出す蚊遣かな

魚淵

大和路の駕の寢覚や雉子の声

春紫

達磨忌や髭のあたりに作り花

雲州松江

富扇

冬枯や風透く窓の編大根

可積

温泉の村の空にしぶとし雲の峰

倭川【(ウ九)】

山彦の相槌淋し小夜砧

橘秀



男独り笠縫ふ岡や百日紅

鯖の火や青海原の星月夜

春雨や国の名も散る道者笠

猪の身震ひ軽し山ざくら

○若艸やはや古びたる忍ぶ摺

埋火や咄はたへて鶴の声

着せ綿も身に知られたり後の月

世の寒さ軒へ来て啼く火たき哉

掛戸樋の盈るゝ方や秋海棠

蛇の住だ池ともいへり杜若

節季候やまだ目の覚ぬ揚屋町

且散れど塵とはいわぬ紅葉哉

鹿聞や都はなれて都人

燕や西に東に飛の形り

夕ぐれのひたと重なる落葉哉

俯けに植行軒のあやめかな

舞へはやせ諷ふて年を白拍子

鳴立て雨聞すます門田かな

日やまれに落葉の埋む谷の坊

土手形りに踊て戻る夜明哉

陽炎や御庭へ通す鏡磨

庭石に車舎りや蝸牛

雲州松江

黎慶

野椿や崩た俣の普請小屋  
宝塔は雲の半ばよほとゝぎす

同 大塚

蛾風

筒柳

○蜂の巢や隣は蜘蛛の独り住

芦丈〔十一〕

横に見る伏見の町や雉子の声

芦丈〔十二〕

百天

独り寐る傾城あわれ星合夜

清仙

友徳

頭から腐るや春の雪達磨

楚江

春紫

垣間見や隣へ逃る虫の声

呂船

冠李

短夜や夢の花散る明の鐘

野牛

清仙

鏡にも久しき旅の清水かな

雲州松江

芦葉

如舟

蝶の来て踏こかしけり芥子の花

野牛

富滝

横に日のさす家もあり冬椿

伯州米子

桂花

鈍石

二三枚残る葉寒し猿の声

其垣

富由

漉こむは花の雫歟吉野紙

清仙

可積

筆柿や硯も持たぬ坂の家

富瀧

富川〔十一〕

鶯や垣結び廻すまぢか竹

富水〔十二〕

度翠

不器用に落て淋しき一葉かな

度翠

深艸

土山の時雨見に出て坂の月

都扇

東湧

朗や霞の中の金山山

度翠

白馬

お化粧の水の行衛や杜若

富寛

黎慶

なまなかに闇こそよけれ時鳥

楚江

可積

弁当の枕おどりや桜陰

富滝

瑞子

ほの闇き一の行場やかんこ鳥

紅羅

葉ざくらに又曇りけり吉野山

清仙

春雨やむら／＼青き牧の芝

其友

短冊に人柄見ゆる桜かな

雲州井尻

亀玉

時雨る、や松の梢に日の雫

巴竜

寐ぬ人の猶静也鹿の声

雲州六道

貞下

包たる反古読ける蜚かな

知風

夕只や戸口へ覗く油壳

雲州六道

白扇〔十三〕

鉢叩聞て五條の雨の跡

富滝〔十四〕

灸すへた友も折よし初ざくら

雲州六道

如舟

白雨や戸樋行水に日の光り

遊糸

菩提樹や浮世に遠き寺の庭

雲州六道

的羊

遠山をひそかに盗む時雨かな

度翠

穢たが家も夏には洩ぬ蚊遣かな

雲州六道

理々

きり／＼す添へて置けり薪壳

如舟

独り寐て椽栢の音聞く寒かな

雲州六道

吟峯

嗽られて待夜も撫る火桶哉

清仙

汐浴した宿をしるべや鹿の声

雲州六道

富梁

入梅晴や垢のぬけたる宵の月

兼古

十三夜更て田面の遊び鶴

雲州六道

指秋

物凄き片山寺や五月闇

同 三保関

文籬

一時雨過行あとや竹生寫

雲州六道

孚尹

舟橋も腐付たる氷かな

同 三保関

柳子

風蘭や片枝朽る神の杉

雲州六道

知風

明星や嶋のはな行雁一ツ

何用

木地挽に魂見せつ帰り花

雲州六道

如舟

蛸や石山登る籠り人

富滝

□物に日は暮にけり春の雨

雲州松江

清虎

薺や粗傾城は常の人

竜志

山陰や栗の花踏む雨の寒

雲州松江

如舟〔十三〕

煤掃や数の揃ひはした本

吟峯〔十四〕

妻を乞ふ鹿衾なり床の山

雲州六道

歌蛙

笹啼や藪より出る旭影

歌蛙

寐返しもせぬ子を覗く夜寒哉

雲州六道

鷹平

魂を見居へし雨の柳哉

雲州大塚

其笛

逢恋の短冊付けし桜かな

雲州六道

蘭水

姉の手は一枝高し桃の花

同 安来

蘭水

時雨る、や墨絵の中の一ツ家

雲州六道

其英

干物になぶらる、日や幾しぐれ

同 安来

小林

三日月に追はれて戻る汐干哉

雲州六道

巴竜

糸遊や神馬髪結ふ垣の上

同 安来

枝一

六原の戦嘶しや秋の暮

雲州六道

指秋

君が為水もぬるむや菜摘川

同 安来

冠李

遠騎の戻る木の間や朧月

雲州六道

鶴江

一曇り星覆ひけり天津雁

同 安来

吟峯

色鳥や木の葉交りの嵐山	富扇	叶ふた敷更て打出す小夜衣	清虎
虫干や羽織の袖に花一ッ	黎慶	山吹や庭へ切込む細流	富守
夏菊や囲の窓に日の埃	露光	草に入て朝露となる螢かな	子芳
斧の音鐘より憎し山桜	蘭水 <small>〔十五〕</small>	寒月や更て襖の立合せ	可積 <small>〔十六〕</small>
馬の尾に蠅の打るゝ暑かな	雲州松江	駒繫ぐ人もいとほし桜の実	花積
春雨や無筆交りの哥がるた	富守	魂の有たけ延るつらゝかな	蛾風
女郎花牛にも靡く嵐かな	其積	灌頂の杳の音ありびわの花	倭川
折ふしは簫聞へけり春の雨	俊川	塩竈のけぶりや絶て浜千鳥	霜鬚
鏡山名而已斗の霞かな	里英	水音の頻にくらき新樹かな	富由
裏町へ月も廻るや鉢敲	同 市成	旅人や絵に似て須磨の村しぐれ	宜哉
若苗や日にくゞ高き青嵐	同 松江	分別の投やりもあり花ざかり	富滝
当にせぬ人にも思ふ踊かな	霜鬚	誉る人母は見に出るおどり哉	山洞
更て風呂焚く長町やきりぐゞす	富川	夜や寒し落葉の上の雨の音	慶子
水早し鵜縄にかゝる三日の月	如舟	毛氈の隣は近し花の山	知友
春風はさまで罪なし高雄山	湖竜	一さがり散て見せたる花火哉	竜志 <small>〔十六〕</small>
啼ほどの秋には落ちず鹿の角	稲友 <small>〔十五〕</small>	初雁や女道者の国咄し	伯州米子
雪解や涉し場かわる川嵐	寿山	稲妻や窓を覗けば元の闇	朝烏
釣鐘を扇で叩く花見哉	富守	藤さくやいづれの尾より野田の明	巴竜
鈴虫や野々宮近き小夜嵐	石州福光	夕立や祇園わたりの捨艸履	其友
釣簑に螢の遊ぶ雨夜哉	知風	菅笠で招きあふたり植乙女	知風
老女来て菊の露見る垣根哉	可積	明る間は窓靡なり山ざくら	如舟
僧独り涉しを待や片時雨	寿風	板橋にひづみの見ゆる暑かな	椿花
	予州宇和島		浮遊
	壺州		
	雲州松江		

夜嵐にとわれて動く案山子哉

知風

昼良や夢見に戻る男ども

義風

物思ふ関守若し星今宵

芳水

葦より内に夜はありけふの月

雲州六道

芦橋

鳴立や星かき曇る水の上

春紫

春雨や旅人独り橋の上

呂船

花に借る世帯道具や暮隣

雲州松江

我向〔十七〕

寐て蝶の夢なりと見ん花の留主

仙菊〔十八〕

手を洗ふ水を提行く汐干哉

其友

山水に米はつかせて小夜砧

籟之

稲妻や二度に渡りし橋一つ

雲州井尻

嵐水

骨折て山見出しけり八重霞

富守

閑居鳥二人聞こそ淋しけれ

理々

河岸の雨撫卸す柳かな

白扇

気の軽ひ水の音なり梅の花

敬之

名月や独り笑ふて戻り橋

雲州松江

亀泉

蝶々も出て取持し花野哉

積水

楊妓妃の眠る姿や雨の萩

同 六道

雁里

鶉に動く浪斗也春の空

鷹平

草箆に売残たる蝨かな

同 女

むね

夕良や米つき白むうしろ口

似教

冬枯や沢に流るゝ星の影

野牛

洛外の鐘近ふなる落葉哉

富石

○梅咲や御燈の洩る折葦

清仙

山寺に炭切る音やびわの花

万路

〔十八〕

旅の夜や鹿聞空に星一つ

寿風

〔静顧〕〔詞臨〕 追加

桜見や鼻をそむける車牛

芦丈〔十七〕

こたび父富英が抜萃したる諸好士の句々を見るに、

茎立や野路の庵の表がへ

筍柳

珠をつらね錦を織るが如し。予も此集に加はらん

梅咲や女の見入る鏡の銘

理々

ことを願ひて、ひそかに禿筆を嚙み、余興のしも

瘦馬の尻ひづみけり秋の雨

雨柳

べにかひつくる〔十九〕ものならし

出飯屋に炭折音や春の霜

富滝

此樹々の華は

松の声果は鳴海の野分哉

清虎

散らまし

隠れ井も日に覗かるゝ枯野哉

一桂

千代の空

笛風楼

聞柳

〔春周庵〕(刻陽) 〔家在松江橋北〕(刻陰)

願主

投桃軒不老

錦江舎野牛

甫助

金縷亭度翠

維時寛政四壬子彌生吉辰

心齋橋筋北久太郎町北江入

浪華書林 丹波屋傳兵衛

〈参考図版〉

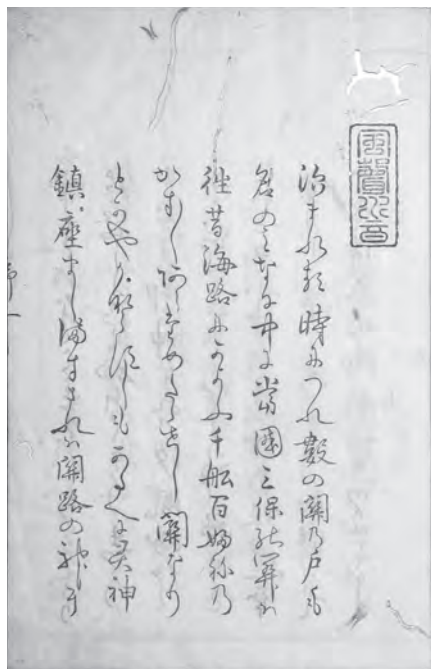
1. 表紙



〔二十九ウ〕

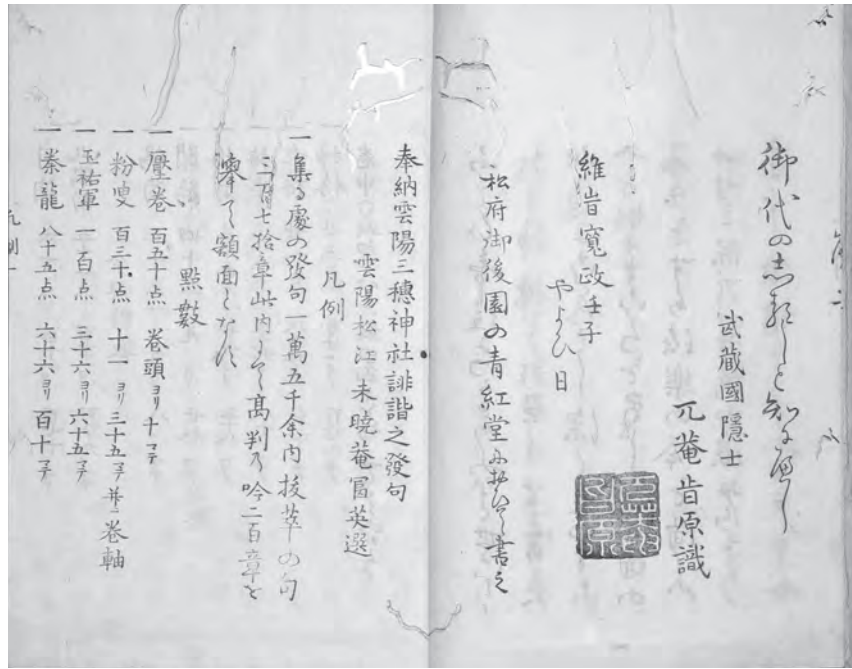
〔表裏紙見返し〕

2. 序文冒頭 (一才)

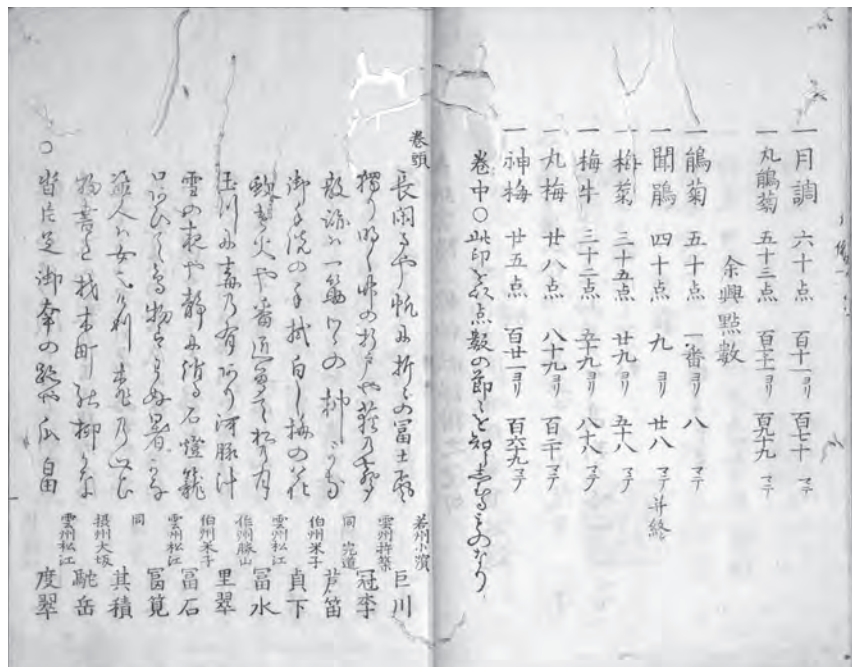


(六五)

3. 序文末尾・内題・凡例（二）ウ・「三」オ



4. 凡例末尾・本文卷頭（三）ウ・「四」オ



5. 本文〔九〕ウ・「十」オ

揚子江の流も多し毒の毒  
 時石  
 満城の月を益しや山を冠  
 雷水  
 軟叶や舎人の眠る加茂塘  
 兔僕  
 夕日や下すよしの流る  
 和風  
 毒の毒の流も多し毒の毒  
 稻蝸  
 毒を形傾くうとや毒の毒  
 露螢  
 埋井と適よるりやを橋  
 一柱  
 彫泥も有る毒や輝の毒  
 花積  
 古き火鉢を出れ蚊を  
 魚淵  
 遠く忌や毒の毒も毒の毒  
 雷扇  
 温泉の村は毒も毒の毒  
 倭川  
 結ぶも毒の毒の毒の毒  
 雷由  
 鈴虫や毒の毒の毒の毒  
 備前  
 浅竹

右額面

追加

はちまきや神古くは  
 恐ろしやけりな光の影  
 うすく数千の句章と  
 拵りしゆもたは縁め  
 是るといへりしゆ

6. 本文〔十〕ウ・「十一」オ

廣新よ使へて遠事  
 目も  
 思ふ  
 古稀叟  
 鶉富英  
 朝露や日よめぬ外馬の尻  
 度翠  
 大和流の駕の毒を毒の毒  
 春榮  
 冬枝やゆき透く忘の漏大根  
 可積  
 山表の相槌佛一昨夜  
 橋秀  
 田のりも毒の毒の毒の毒  
 黎慶  
 錆の火や毒の毒の毒の毒  
 雷松  
 毒の毒の毒の毒の毒  
 箱柳  
 甘丈

余興

